

愛知県豊橋市におけるコシギ *Lymnocyptes minimus* (チドリ目シギ科) の観察記録

高木慎介¹⁾

Observation record of Jack Snipe *Lymnocyptes minimus*
(Charadriiformes: Scolopacidae) from Toyohashi city, Aichi prefecture

Shinsuke Takagi¹⁾

はじめに

コシギ *Lymnocyptes minimus* (Brünnich, 1764) はチドリ目 Charadriiformes シギ科 Scolopacidae に属する鳥類の1種である。本種はユーラシア北部で繁殖し、ヨーロッパ・アフリカ中部・インド・東南アジアで越冬し、日本では全国で数少ない旅鳥または冬鳥として記録があるとされるが (桐原ほか, 2009), 日本鳥学会 (2024) では、国内で記録のある全ての地域で accidental visitor (迷鳥) あるいは irregular visitor (不定期な渡り鳥) としてカテゴライズされており、「数少ない」よりも寧ろ「稀な」旅鳥または冬鳥である。愛知県では1981年9月3日に弥富市の鍋田干拓で1例の記録があるとされる (愛知県環境部自然環境課, 2018) が、この記録は観察情報のみであり、写真や標本などの種同定の正確性について検証可能な資料を伴うものではない (杉山時雄私信)。筆者は、豊橋市老津町の水田地帯において2020年9月26日に本種を発見し、その後、継続的に観察・撮影することに成功した。また、2020年12月5日に当該個体を保護し、翌6日に放鳥した。本観察は、愛知県における確実なコシギの観察例としては初めてのものとなるため、ここに報告する。

観察日時・場所

2020年9月26日21時30分頃に豊橋市老津町の水田地帯 (34° 42' 19.3" N, 137° 20' 34.1" E 付近) でコシギを発見し、以降同年12月3日にかけて夜間に断続的に当該個体を観察した。

2020年12月5日21時30分頃に同所で飛び立てない当該個体を確認し、一時保護し、翌6日10時頃に同所で放鳥した。

2021年3月15日21時頃に当該個体と思われるコシギを同所で発見し、翌16日20時にも同所で観察し、以降は観察できなかった。

観察した環境

観察地は200 m × 600 m 程度の北西から南東にかけて長い水田地帯で、丘陵地の緩やかな谷状部分に位置する。水田地帯の中央部には南東から北西に幅5 m 強の境川が流れている。周囲の高台は主に畑として利用され、住宅地も点在する。水田地帯南東側には国道259号線が走り、交通量が多い。水田地帯北西側には境川の河口があり、小規模なヨシ原があるが河口の数十メートル対岸は埋め立てされて広大な工業地帯となっており、境川は海ではなく、実質的に水路に開口しているかのような地形となっている。観察期間より前に観察地では既に稲刈りは終わっており、二番穂が伸びて青々としている田もあった。また、休耕田も点

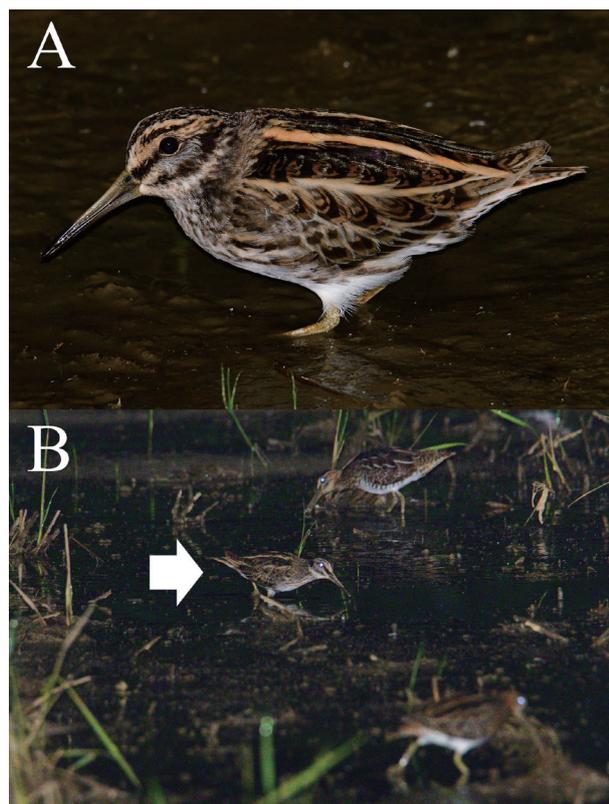
1) 愛知県豊橋市西高師町字小谷 26-21. 26-21 Kotani, Nishitakashi-cho, Toyohashi, Aichi 441-8154, Japan. E-mail: k6117824@kadai.jp

原稿受付 2024年10月4日. Manuscript received Oct. 4, 2024.

原稿受理 2024年11月29日. Manuscript accepted Nov. 29, 2024.

キーワード: *Lymnocyptes minimus*, コシギ, 豊橋市, 愛知県.

Key words: *Lymnocyptes minimus*, Jack Snipe, Toyohashi city, Aichi prefecture.



第1図. 豊橋市老津町で観察されたコシギ。
A, 側面 (2020年11月23日撮影); B, タシギとともに採食するコシギ(矢印の個体, 2020年10月12日撮影)。



第2図. A, 放鳥前に確認した外側初列風切 (右翼); B, 下尾筒; C, 尾羽 (背側)。

在しており, セイタカアワダチソウ *Solidago altissima* L., ヨシ *Phragmites australis* (Cav.) Trin. ex Steud., ガマ *Typha latifolia* L. などが密生した休耕田もあった。降雨の状況により, 地面の湿った田は日々変化しており, 当該個体はエリア内の地面が湿って泥状になっている田で観察された。当該個体は二番穂の伸長していない田にもよく渡来しており, 田が草本等に被覆されてい

ることよりも地面が湿っていることを優先して餌場を選好していると思われた。

観察距離

野外観察において距離は2~50 m程度で, 10倍の防振双眼鏡で観察し, デジタル一眼レフカメラに焦点距離150~600 mmのレンズを装着して撮影した。夜間観察では懐中電灯を用いた。保護した際には, デジタル一眼レフカメラに焦点距離18~200 mmのレンズを装着して撮影した。

種及び齢の同定

当該個体は, 枯草や茶色の地面に溶け込むような褐色の迷彩模様の羽衣, 周囲のタシギ *Gallinago gallinago* (Linnaeus, 1758) より小さいサイズ, 直線的な長い嘴といった特徴を持つことから, シギ科あるいはタマシギ科 *Rostratulidae* の一種と考えられる (第1図)。当該個体は副眉斑を持ち, 肩羽に紫色光沢があり, 尾が楔状に尖っていた。世界のシギ科及びタマシギ科の鳥で, これらの特徴と合致する種はコシギのみである (Billerman et al., 2022)。

Demongin (2016) によれば, コシギは①外側初列風切先端の形状 (幼鳥では尖り, 成鳥では丸みがある), ②下尾筒の軸斑 (幼鳥では細く不明瞭, 成鳥では太く明瞭), ③外側尾羽先端の形状 (幼鳥では尖り, 成鳥では丸みがある), ④外側尾羽の模様 (幼鳥では淡色な羽縁が細い暗色の羽軸で分断されるが, 成鳥では淡色な羽縁は分断されない) で齢識別できるとされている。当該個体の外側初列風切先端の形状は丸みがあり, 下尾筒の軸斑は太く明瞭で, 外側尾羽先端の形状は丸みがあった(第2図)。外側尾羽の模様については, 中央尾羽をT1とし, 最外側尾羽をT6として順に示した場合, T5とT6については先端内弁側が黒く, そもそも淡色羽縁を形成しておらず, 判断できなかった。T3とT4先端の淡色羽縁は暗色の羽軸によって分断されていなかったが, T3及びT4を「外側尾羽」に含めるかはDemongin (2016) に記載がなく, ④の点は判断保留とした。①から④の特徴を総合的に判断した結果, 当該個体の齢を成鳥と同定した。

2020年9月26日~同年12月3日の観察状況

2020年9月26日21時30分に二番穂の伸びた, 地面の湿った刈田で採食する10羽程度のタシギを観察



第3図. A, 2020年12月6日の放鳥直後に水路で硬直したコシギ; B, 2021年3月15日に再発見したコシギ.

していたところ、タシギ群中にタシギより一回り小さい当該個体を発見した。その後、不定期ではあるが、週に1回から4回程度確認に訪れたところ、同年12月5日までは、ほぼ毎週夜間に観察された。水田地帯は降雨状況により、地面の湿潤状況が大きく変化しており、発見地点から半径200 m以内の地面がよく湿った刈田で観察された。当該個体は主にタシギと行動をともにしていたが、単独行動をとることもあった。また、総じてタシギよりも小さく見えたが、タシギのかなり小さい個体とはほぼ同大に見えることもあった。9月下旬から10月中旬にかけては、同所でコチドリ *Charadrius dubius* (Scopoli, 1786)、ケリ *Vanellus cinereus* (Blyth, 1842)、セイタカシギ *Himantopus himantopus* (Linnaeus, 1758)、ウズラシギ *Calidris acuminata* (Horsfield, 1821) も夜間に観察された。

当該個体は、よく採食行動をとっており、湿った泥状の地面に嘴を垂直に突き立て連続して突き刺していた。何を捕食しているのかは確認できなかったが、ミミズのような大きな餌ではなく、微小生物を捕食していたものと思われる。

コシギはアオシギ *Gallinago solitaria* (Hodgson, 1831) のように体を上下に屈伸する動作をすることが知られる(真木ほか, 2014)。Svensson et al. (2022) では、採食行動中によく 'bouncing action' をする点が特徴的である、との記述がある。しかし、筆者が十分な距離(10 m以上)をとって観察した際には、当該個体が採食中に上下の屈伸動作をすることはほとんどなかった。一方、筆者と当該個体の間が数 m 程度の近接した状況

では、頻繁に上下の屈伸動作を行い、採食行動を伴わなかった。このことから、上下の屈伸動作は採食に伴う動作ではなく、警戒動作だと考えられた。

コシギが鳴くことは稀とされる(Chandler, 2009; Svensson et al., 2022) が、当該個体は飛び立つ際にタシギとよく似た「ジェッ」という声や、より甲高い「キシェッ」という声でよく鳴いた。また、同所に渡来したコチドリと小競り合いをすることがあり、その際には甲高く擦れた「キイー」や「キシイー」といった声でよく鳴いた。

2020年12月5日から翌6日にかけての保護時の状況

2020年12月5日21時30分頃に右翼が下垂し、全身が濡れて飛べなくなった当該個体を発見・保護した。外傷を確認したところ、右腋に出血があり、そのために羽ばたけないうだった。また、左側の肩羽、三列風切の一部が脱落していた。12月5日以前に観察地で首輪のついたネコ *Felis catus* (Linnaeus, 1758) が草藪からタシギ群を狙う様子を複数回見かけたほか、キツネ *Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758) やタヌキ *Nyctereutes procyonoides* (Gray, 1834) なども複数回見かけたため、これらの捕食者から攻撃を受けた可能性が考えられた。筆者の自宅に当該個体を持ち帰り、翌朝に当該個体の状況を確認したところ、右腋の出血は止まり、全身の羽毛も乾燥し、飛び立てそうに見えたことから、年齢識別のために初列風切、尾羽、下尾筒の写真を撮影した後、10時頃に観察地で放鳥した。当該個体は無事に飛び立ち、付近の水路に降り立った。筆者が様子を見に水路を覗き込んだところ、しばらく水路内で硬直した後(第3図A)、飛び立ち、付近の二番穂の伸びた田の中に降りた。当該個体を日中に確認したのは、この放鳥直後のタイミングだけだった。

2021年3月15日及び翌16日の観察状況

放鳥後も滞在期間の確認のために週に1~3回程度、夜間に確認に訪れたが、水田地帯の地面の乾燥が進み、湿った地面のある場所がなくなってしまったためか、当該個体を全く見かけなくなった。2021年3月15日21時に観察地を訪れた際に、地面が水で覆われた水田を認めたため、探索したところ、コシギ1羽を確認した(第3図B)。2020年12月5日の保護時に確認した左側の肩羽、三列風切の脱落はなかったが、3か月以上経過しているため、同一個体だとしても、脱落部分は伸長しているものと思われる。この個体が2020年9月26日から同年12月6日まで確認した個体と同一か

どうかの判断はできなかったが、コシギの日本での希少性を考慮すると、春になって別個体が渡来した可能性よりも同一個体が観察地で潜んでいた可能性の方が高いと思われた。翌3月16日20時にも同所でコシギを観察した。その後、4月上旬まで同所に確認に訪れたが、3月16日以降、確認することはできなかった。

まとめ

当該個体について日中の確認も何度か試みたが、放鳥直後以外には一切確認できなかった。小田谷ほか(2019)は2017年10月から2017年12月にかけて千葉県内で3個体のコシギを発見しているが、いずれも夜間のみの観察で、日中に確認することはできなかったとしている。小田谷(2021)は、国内でコシギの記録が少ないことについて、日中の潜行性の高さが影響している可能性を示唆している(なお、当該文献に記載されている2020年9月～2021年3月の愛知県の記録は、本観察記録である)。今後、夜間観察を試みる人が増えれば、愛知県内からもコシギの更なる記録が増える可能性がある。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、1981年9月3日の愛知県弥富市におけるコシギの記録状況について、杉山時雄氏にご教示いただいた。この場を借りて感謝申し上げる。

引用文献

- 日本鳥学会, 2024. 日本鳥類目録改訂第8版. 日本鳥学会, 東京, 506 p.
- 小田谷嘉弥・新條正志・先崎理之, 2019. 千葉県におけるコシギ *Lymnocyptes minimus* 3羽の標識放鳥及び観察記録. 日本鳥類標識協会誌, (31): 10-21.
- 小田谷嘉弥, 2021. Young Guns の野鳥ラボ Season II #79 コシギ. BIRDER, 35 (10): 48-51.
- Svensson, L., Mullarney, K., Zetterström, D. and Larsson, H., 2022. *Collins Bird Guide 3rd Edition*. William Collins, London, 476 p.
- 愛知県環境部自然環境課, 2018. 愛知県鳥類生息調査(1967-2016) 50年の記録. 140 p. <https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/501460.pdf> (2024年9月1日閲覧).
- Billerman, S., Keeney, B., Rodewald, P. and Schulenberg, T.(Editors), 2022. *Birds of the World*. Cornell Laboratory of Ornithology. <https://birdsoftheworld.org/bow/home> (2024年9月5日閲覧).
- Chandler, R., 2009. *Shorebirds of the Northern Hemisphere*. Christopher Helm, London, 448 p.
- Demongin, L., 2016. *Identification Guide to Birds in the Hand*. Published by the Author, Beauregard-Vendon, 392 p.
- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2009. 日本の鳥 550 水辺の鳥 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 367 p.
- 真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650. 平凡社, 東京, 788 p.